

プログラム

メインテーマ：『南丹エリアにおける地域医療と地域防災』

- (1) コーディネーター
〔保健医療学部救急救命学科〕 教授 木村 隆彦, 〔看護学部看護学科〕 講師 大倉 和子
- (2) 開会の挨拶
〔研究部長 (研究委員長)〕 教授 林 知也
- (3) 演題発表
- 15:05~15:15
・柔道整復師が考える地域医療と地域防災について
〔保健医療学部柔道整復学科〕 助教 吉元 拓也
- 15:15~15:25
・地域における子どもの健康支援～地域から災害支援へ～
〔鍼灸学部鍼灸学科〕 講師 田口 玲奈
- 15:25~15:35
・地域防災と地域医療の連携に向けて：大学の役割と責任
〔保健医療学部救急救命学科〕 講師 久保 敦士
- 15:35~15:45
・災害発生時の地域保健活動から考える平常時の備え
〔看護学部看護学科〕 講師 大倉 和子
- 15:45~15:55
・地域と連携する大学としての防災研究について
〔附属防災救急救助研究所〕 所長 智原 栄一
- (4) 総合討論
15:55~16:25

(1) 柔道整復師が考える地域医療と地域防災について

吉元 拓也

保健医療学部救急救命学科

柔道整復師と地域医療・地域防災とはどの程度関係しているのか？そもそも柔道整復師の仕事って何だろうか？と思う人は少なくない。実は柔道整復師の地域貢献は多岐にわたる。柔道整復師が行ってきた（または行っている）そして今後、どのような未来を考えているのかを過去・現在・未来で話していきたい。

法的に認められている我々の業務範囲を医師、他医療従事者、一般の人々に理解してもらうことにより信頼関係が構築されるとともに柔道整復師としての役割がより明確化されると私は考える。このシンポジウムを通して“柔道整復師の存在意義”を見出していきたい。

(2) 地域における子どもの健康支援 ―地域から災害支援へ―

田口 玲奈

鍼灸学部鍼灸学科

これまでに子どもの健康支援として、毎年、親子スキンタッチ教室を開催して早 14 年、様々な子育てイベントや保育園などで活動を行ってきた。

親子スキンタッチとは、鍼や灸の代わりにスプーンや歯ブラシ、ドライヤーなどを使って、皮膚をなでたり、こすったりする家庭で行う健康法である。子どもの健康支援を行うメリットには、子どもの健康管理・増進のみならず、幼い頃からの健康に対する意識付けが将来の健康を大切にすることや自己管理につながり、また、将来の鍼灸受療や鍼灸師の育成にもつながると考える。さらに、このようなイベントを通じて、子育て世代同士のコミュニティが形成され、子育ての悩みの共有や情報交換、相互支援などの場となり、地域のつながりを強化する役割を果たすと考えられる。

今回は、地域での健康支援から果たせる災害時の役割・支援について考察する。

(3) 地域防災と地域医療の連携に向けて：大学の役割と責任

久保 敦士

保健医療学部救急救命学科

本研究の目的は、地域の一部である大学が、地域医療や地域防災にどのように貢献できるかを検討することである。

本学は、オンライン教育などで利用するテクノロジーを活用して、地域住民への貢献や学生に実践的な医療技術やチーム医療の重要性を学ばせる場を提供することを目指している。また、地域の課題解決や地域づくりに取り組むために、地域の主体性を尊重し、大学のコーディネーション機能を強化することを考えている。

本研究では、これらの取組みの効果や課題を分析し、地域医療や地域防災の活性化における大学の役割と責任を明らかにする。

(4) 災害発生時の地域保健活動から考える平常時の備え

大倉 和子

看護学部看護学科

南丹圏域においては、京都府南丹保健所を事務局として管内医療機関・関係団体が災害医療体制整備に取り組んでいる。本学においても、南丹市と「大規模災害時における避難所利用に関する協定書」を締結しており、災害発生時の対応は喫緊の課題となっている。

平成30年7月に発生した西日本豪雨災害を振り返ると、隣接の中丹圏域において土砂災害による死者4名と甚大な被害が出た。当時、管轄保健所において、保健師の健康相談活動の総括にあたり、京都府内保健所からの支援を受け17日間で延べ73名の保健師による911件の家庭訪問活動を行った。健康相談結果をとりまとめ、医療・保健・福祉等に関する健康課題を明らかにし、平常時の備えについて考察したので報告する。なお、本学の平常時の体制構築にむけて、日本看護系大学協議会が行った災害の備えに関するアンケート調査結果についても紹介する。

(5) 地域と連携する大学としての防災研究について

智原 栄一

附属防災救急救助研究所

【現状分析】

- # 1 地域性：周辺地域の交通の便は悪く、高齢化と人口減少があり基盤産業の農林業の経営規模は大きくない。大学と地域の交流は附属病院受診以外盛んとは言えない。
- # 2 防災の観点から見た大学：救急救命学科は災害関係の周辺知識や技能は有している。鍼灸学科・柔道整復学科などの統合医療は高齢者医療や被災者支援との親和性が高く、看護学科は在宅サービスや災害医療などの関連教科を持っている。
- # 3 想定される災害：地震や豪雨などに起因する土砂災害。高気温・乾燥による山林火災。大規模交通時期・ダム機能不全や近隣の原発事故など。この結果生じる 交通遮断や停電・断水などのインフラ機能停止。特に散在集落の孤立。

【対応策は？】

“できることから始め いざという時できるように” 高度成長期の坂道を駆け登る日本ではなくインフラが老朽化し自然災害が多発する人口減少社会の中で、我々は手の付けられるところからどのように地域とのつながりを大学教育研究の中で行うかが重要である。

総合討論

木村 隆彦¹⁾, 大倉 和子²⁾

¹⁾保健医療学部救急救命学科, ²⁾看護学部看護学科

総合討論では、南丹エリアにおける地域医療と地域防災をテーマとして、本学が推進すべき研究・教育の在り方と地域貢献を視野に入れた地域との関わり方について議論する。

研究委員会が主催であることから、防災分野では、災害発生時に大学が組織的に展開する避難所設置等の行動や必要となる備蓄、また災害派遣といった、災害実務・活動要領に関する事項は、議論の対象としないことにご容赦いただきたい。

また、防災は「救急救命学」の範疇であるという思い込みがある。防災の中での「救急」は応急手当に関する部分に限定されており、また災害時の活動をみても、「救急」は必要とされる膨大な活動の中の1つにすぎない。むしろ、鍼灸、柔道整復、看護などの日常業務の中で繰り上げられる市民とのコミュニケーションの場は、防災の最前線であることという認識に立ち、本学研究者による横断的な議論を期待している。